

遊休農地で世代間交流

純真高2年・鎌田さん 問題解決へ提案

福岡市南区の純真高2年鎌田悠世さん(16)が、農作物の種まきや収穫を通して世代間交流に取り組んでいる。耕作されていない遊休農地の活用と、孤立しがちな若者の居場所作りという二つの社会問題の解決を目指しており、県などが高校生の実業提案に最大50万円を助成する今年度の「未来をつくる高校生チャレンジ」に採択された。

(手嶋由梨)



祖父の秀徳さん(左)や友人と一緒に芋掘りをする鎌田さん(左から2人目)

県「高校生チャレンジ」に採択

10月下旬、鎌田さんが企画した初めてのイベントがあった。鎌田さんは、祖父・秀徳さん(83)の畑近くにある同区の遊休農地でサツマイモを栽培。この日は、高校生の友人2人が、大きく育ったサツマイモを収穫した。

秀徳さんのアドバイスも受けながらシャベルで芋を掘り起こした同高1年井筒百香さん(16)は「最初は実を傷つけてしまったけれど、コツをつかめた。今度は育ててみたい」と話し、鎌田さんも「楽しんでもらってよかった」とほっとした表情を見せた。

このイベントは、県などが2022年度から実施する「未来をつくる高校生チャレンジ」の採択事業として開いた。4～5月に今年度の募集があり、鎌田さんは身近に感じていたひきこもりなど若者の孤立と、担い手不足で農地が余っている問題を一緒に解決できな

いかと提案。選考で採択された7件の一つに選ばれた。

イベントの開催に向け、鎌田さんは秀徳さんの畑の近くで草が生えたままになっていた遊休農地を借りて畑を整備。8月には、大阪市で障害のある人たちを積極的に雇用してハウス栽培に取り組んでいる会社を1人で訪問し、社長へのインタビューも行った。

一方で、課題も見つかった。不登校やひきこもりの若者とのマッチングを想定していたが、支援団体に尋ねると「無理に外に連れ出すのは難しい」「一人一人事情が違う。まずは人間関係を築くことが大事」とアドバイスを受けた。現場を知ることによって「自分のプロ

ジェクトの甘さに気づいた」という。

まずは世代間交流を目指そうと、友人に協力を求めて今回の収穫イベントを開催。もっと参加者や協力者を増やし、年度内にあと2回イベントを開くつもりだ。同高の的野陽副校長(46)は「発想がおもしろい。外部の人と関わりながらアクションを起こす姿は、他の生徒の刺激になるはず」と期待を込める。

鎌田さんは「土に触れる体験イベントは大人も若者も良い反応だった」と手応えを口にし、「高校生のうちに色々と経験することは必ず将来のプラスになると思っている。反省点を生かして挑戦を続けたい」と意欲的に語った。